2016年　3月　JBBF国内宣教委員会　機関誌　第69号

かいたく

教会のない地域に教会を　刈り入れ場に働き人を

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。　（第二テモテ二章十三節）

旧約聖書の士師記は、失敗と言うより敗北からの回復を記録した書でしょう。そして、それは士師の時代の後に書かれました。その理由は、不従順で真実がない人々を、真実な神様が忍耐して人々を救い、回復に導かれる方であることを学ぶためだったと思います。

さて、その士師記にわずか一節にだけ記録されている士師がいます。シャムガルです。彼は、「牛の突き棒でペリシテ人六百人を打った。彼もまたイスラエルを救った」と記録されています。その名前の意味は、「神が賜った」だそうです。神様が彼に与えられた戦うための武器は、牛の突き棒一本でした。

主の戦いに勝利する秘訣、それは主が与えてくださったもので戦うことです。私たちに与えられた剣は何でしょうか。それは、「信頼すべきことば」である聖書の言葉です。伝道のための手段を色々と考える私たちですが御言葉をもって主に仕え、働かせていただきたいです。

JBBF国内宣教委員長　榎本昌博

かいたく　2016年3月発行　第69号　発行元JBBF国内宣教委員会　長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696-27　編集責任　榎本昌博　デザイン　疋田　健次

国内宣教カンファレンスに参加して

安藤 修司
船橋聖書
バプテスト教会
副牧師

主の御名を賛美します。久しぶりに参加を許され、恵みと励ましを豊かにいただき感謝しています。年始の忙しい時期ですが、六十名もの方々が集われている光景に驚きました。国内宣教委員の先生方を始め、多くの先生方の祈りと継続が豊かな実となっているのですね。三回の集いと分科会や交わり、久しぶりで慣れない中ですが、交わりに加えていただき感謝でした。メッセージや交わりを通して、思わされたのは、伝道の基本の再確認と深化が大切だということでした。神の民、そして弟子、伝道者として、困難は当初から折込み済みです。それは、人類が堕落してからずっと困難と恥を負いつつ、罪に支配された人類を見捨てず、創造の前から「キリストのうちに選」んで下さり、「日々、自分の十字架を負って従いなさい」と召して下さった主に従う道です。キリストから目を離さないで愚直に十字架の贖い主キリストを身をもってあかしし続けることだと教えられ、信じてこの三十数年仕えさせていただきました。これで間違いがなかったのだとの確信を深めて戻ることができました。そして、自分も新人ではなくなったのだから、しっかりしなければと活を入れていただきました。

「国内宣教カンファレンス」と改名され、開拓伝道者の励ましのみならず、教会が立ち続け、少しずつでも前進し続けるために、この集いの大切さが全教会の重荷となれればと思わされました。これから、悔い改めて、毎年参加できるよう祈ります。

恋田 寛正
高槻聖書
バプテスト教会
神学生

昨年9月に34年の社会人生活を経て神学校に入学させて頂いた、高槻聖書バプテスト教会所属の恋田寛正と申します。今回、はじめて国内宣教カンファランスに出席させて頂き感謝申し上げます。

瀬戸聖書バプテスト教会の濱谷先生のメッセージ、開拓伝道中の先生方とのお交わり、分科会での富士山の景色、新年早々多くの恵みを頂きました。国内宣教委員会の先生方、ならびに神学校の先生方に御礼申し上げます。

メッセージでは、神学校での教師でもある濱谷先生から、神さまの目を通した伝道の働き、パウロを通して伝道の心構えと信仰の勝利を学びました（Ⅱテモテ四章七～八節）。一方、分科会（地域社会、他教会との関わり）で、先生方のお話しをお聞きすると、福音伝道のお働きには、地域性の問題、地域との関わりの模索など、日々、戦っておられる、とても厳しい現実があります。魂の救いのため義の冠を目指し、主のご栄光のため地域に仕えておられます。

ビジョンを頂き勝利を得るには、そして、戦いのためには、主からの具体的な必要を充たされることが重要です。今は神学生の身ですので、出来ることわずかですが、魂の救いのため教会員の霊的成長の働きのために、尽力されている先生方の必要が何であるかを更に深く祈っていきます。

新里 知恵喜
調布バプテスト
テンプル
神学生

神様の素晴らしいお名前を心から賛美します！昨年に続き、国内カンファランスに神学生として参加させていただけたことは感謝でした。主イエス様を信じてすべてをお捧げしている、何か特別に共通している先生方と一緒に過ごし、お話しを聞けて励まされました。今年も同じく、特に婦人の先生方と交われてとても励まされました。

最初の婦人集会で、パイエット先生がペテロについてメッセージをしてくださいました。ペテロは、ガリラヤ湖の嵐の中、イエス様の「来なさい」という声に従いました。しかし、イエス様から目を離した瞬間に沈み始めました。このメッセージの中で、私の気づかされたことが一つあります。それは、神様の働きをなんとか自分の力で出来ると思ってしまっている事が多くある、ということです。私たちは、神様の力なしに、神様の働きをすることは、水の上を歩くことができないのと同じ位不可能なのに、イエス様と共に働いてなければ何もできないのにできると思ってしまうのです。私もペテロのように沈むことが多くあります。しかし、すぐに主が手を掴んで引き上げてくださることに心から感謝しました。

献金振込先（郵便振込）
00140・2・654375
JBBF国内宣教委員会

男性分科会報告

テーマごとに分かれ、各グループ五、六人で自由に語り合われました。今回は、その中でも特に、「牧会と説教と交わり」グループを中心にご報告します。上田晃師に、岡崎の二十年を顧みて伝道と牧会について伺いました。

牧会と説教と交わり

（1）名古屋教会の牧会を退き、岡山で開拓伝道に従事した後、岡崎で伝道を再開したのは五十七歳の時だった。岡崎の再開は以前に三河聖書バプテスト伝道所として、ハッサウェイ師と有馬師が開拓伝道を引き継いでくださった町であり、働き人がおられなくなり、再開を信じて一時閉鎖をした経緯がある。

（2）名古屋教会で教会信仰生活を守ってこられた二家族と上田国内宣教師夫婦の三家族でスタート。一家族は、三河伝道所を閉じる時、岡崎で再開する約束をしていた家族である。また、三河伝道所閉鎖後、名古屋教会に在籍された他の四兄姉は名古屋教会に残っていただいた。その後、結婚され家族も増えて、兄姉を加えると、全員で二十名を超える人数になる。それでは員数が多すぎて（国内宣教師サポートの全額が家賃になって）しまう。大半は、名古屋教会に残っていただき、三家族でスタートすることになった。母教会、伝道所共に徳が立つ選択であり感謝だった。

（3）開拓を始めるとき、株分けしていただいた母教会に感謝。基礎会員の家族がおられることは、大きな助け。このことは開拓五年分に相当する。薪は一本では燃えないが、六本あればはじめから燃え上がる。ただ、集会所探しには一年近くを要した。オウムの事件以来、宗教に対する警戒感が強く、集会ができる借家探しが大変であった。この状態は今日も同じで、どこでも困難を覚えておられると思う。

（4）最初の場所は二年で解約され、二番目の場所は難しい条件があり、家主に対して気遣いが大変だった。賛美も小さな声でしなければならずストレスがたまった。新しい方々が教会に来られることにも伝道が制限され、教会成長のビジョンも持てなかった。

（5）こうした逆境の中で、自分たちの自前の会堂の必要を願うように働い、会堂入手のために祈り始めた。開拓当初から会堂建設のビジョンがあったので、必要経費を除いて、会堂積み立てをしていた。三百五十万ぐらい積み立てていたが、教会員の発案で特別に会堂建設献金がささげられ、教会債（無利子）として教会に貸してくださった。加えて、母教会である名古屋教会から高額の献金を特例としてささげてくださり、現在の会堂が入手することができた。主の大きな働きと、兄姉方の主えの愛と献身的な犠牲の賜物と感謝している。

伝道師（セカンドマン）の働き

セカンドマンという立場や働きについて、共に働く牧師と、当事者である伝道師の意見交流がされました。様々な意見が交わされる中で、その一致が見られたのは、牧師とセカンドマンのコミュニケーションの重要性でした。教会の働きにおける牧師の理解と、セカンドマンの理解を一致させることが、円滑な協力関係を築く上で不可欠であることが確認されました。

地域教会・他教会との関わり

自己紹介を兼ねて、参加者それぞれが仕えている教会の地域性について分かち合いました。日本の古くからの宗教が強い地域もあれば、新興住宅地もあり、また地域のしがらみが少ない都市部もあり、それぞれ違いました。古い地域では地域の付き合いや習俗との兼ね合いの難しさが語られ、都市部では人間関係の希薄さ故のコミュニティづくりの試みが紹介されました。急がず、長い視点でビジョンを持って地域に仕えて行く大切さが確認されました。

学び・研鑽と情報交換

まず、興味を持っているテーマを紹介し合いました。次いで、ライフワークとして学びを続けることの大切さ、また現代のインターネット社会ゆえの難しさが指摘されました。情報だけは溢れているが、それらの情報に対する適切な「視点」をこそクリスチャンは提供できる必要がある、ということでした。また、本だけでなく、講演会などを通して今日の諸問題を知る必要も語り合われました。

教会独立と兼職

各教会の現状が順に紹介されました。その後、教会独立に向けた問題を中心に語り合われました。教会内の一致が大切であることや教会会計の管理の必要、また役員や奉仕者等の人材の問題、宗教法人格取得の課題などが話題に出ました。

家庭と心身の健康

分科会に参加した動機、家庭状況の証などを交えながら、課題や、日頃考えていることなどを発表し合いました。子どもたちの成長は教会の土台であり、個性や人格に応じて育てることの必要が語られました。また、教会の働きと家庭のバランスを取ることの大切さや、牧師や牧師夫人の心の健康に常に配慮することの必要も話し合われました。家庭と心身の健康は互いに影響し合い、また伝道牧会の働きの基礎となるゆえ、大変重要であるという認識を共有しました。

２０１６年　国内宣教カンファレンス

失敗からの回復

～主の恵みのお取り扱いの中で～

2016年1月5日から6日、静岡県の朝霧野外活動センターで国内宣教カンファレンスが開かれました。テーマは「失敗からの回復～主の恵みのお取り扱いの中で～」、メインの講師は濱谷勉先生（瀬戸聖書バプテスト教会）、女性集会の講師はサンディ・パイエット先生（茨木聖書バプテスト教会）と三谷克美先生（平塚聖書バプテスト教会）でした。昨年に引き続き分科会での語らいがあり、子供たちはスケートやプラネタリウムも楽しみました。

第一集会

第一集会では、創世記三十二章の「野心家」ヤコブを通して、神の時を待つことについて語られました。誕生の時から兄エサウが弟ヤコブに仕えるとされていました。しかしヤコブは策略家であり野心家でした。ヤコブは神の時を待つことをせず、自分の考えをめぐらせて、兄エサウとの関係を打開しようとしました。しかし人間的な工作は長い目で見ると決してうまくいかず、神の栄光につながりません。伝道者もまたしかりです。ガラテヤ六章七節にあるように、神は侮られる方ではなく、人は刈り取りをしなければなりません。ヤコブはひとり荒野へ逃げ、叔父ラバンのもとで二十年間もいることになってしまいました。

しかしそのような「不信仰」の中にあっても、神は変わらず働きを続けておられました。ヘブル十二章六節にあるように霊的な訓練でもありました。人はこの訓練に向き合い、神の前に悔い改めなければなりません。ベテルとペヌエルの経験。創世記二十八章十五節にあるように「決してあなたを捨てない」という約束があります。ヤコブが勇気づけられました。どんなに困難な状況にあっても、神が自分を召してくださったのだ、神が今この場所においてくださっているのだ、という事実を伝道者は忘れてはなりません。ヨハネ十五章十六節。また、創世記三十章四十三節にありますように、神は失敗した者から祝福を取り去られるわけではありません。

彼の生涯のもう一つのポイントは創世記三十二章でのペヌエルの経験でした。神の側から介入してくださるという恵みです。彼はエサウに会いに行くとき、初めは列の後ろにいました。しかし神の使いとの組み合いをした経験の後、列の先頭に立って進みました。そしてエサウに受け入れられました。神は自分を明け渡すことを学んだとき、神は解決に導き、ヤコブを変えてくださいました。個々の問題ではなく、神との関係がどうあるかこそが、最も大切です。

第二集会

第二集会では、イエス・キリストの一番弟子であり、自分の弱さに泣いたペテロについて語られました。ヨハネ福音書二十一章十五節から。マルコ十四章二十九節などで描かれているように、ペテロの気質は「多血質」つまり直情的で自負心にあふれた性格でした。それゆえの失敗の一つ目は、マタイ十六章二十一節からの主イエスの十字架の否定でした。二つ目は、主イエスの捕縛後の否認です。

伝道者もそれぞれ違った気質をもっており、アンバランスさを持っています。特に時間や金銭におけるルーズさには気をつけなければなりません。また、病的な問題については「信仰さえあれば」ということではなく、専門家の助けを借りる必要があります。第一コリント一章二十七節にある通り、神はこの世の愚かな者、弱い者を選び、用いられます。主がある人を働きに召される時、責任を取って下さいます。イエス様はペテロの失敗を想定した上で召しました。ルカ福音書二十二章三十一、三十二節にあるように、きちんと立ち上がらせてくださいます。思い上がりのあったペテロには、砕かれる経験が必要であった。どれほど賜物があり有能な人であっても、へりくだりを学ばなければ神には用いられません。

講師自身、本気で辞めたいと思ったこともありました。それは自分のバランスを失った経験でした。自分と合わない人たちを排除しようとし、しばらく伝道牧会を退きました。そのようなことを通し神が置かれた場所で、御言葉を語ることの有り難みを教えられました。なお、大変な中に置かれている時、新規な教えに飛びつく必要はありません。長年のキリスト教の積み重ねがあることを覚えたいと思います。

ペテロの良さは、捻くれたプライドがないことです。素直さがありました。復活後のガリラヤ湖畔で、ペテロは三度イエス様から「私を愛するか」と問われました。砕かれていたペテロは慎ましくお答えした。そして試練の中にある兄弟姉妹たちに手紙を送る者となりました。そして最後に殉教したようです。

しかし、昔のペテロが顔を出すこともありました。ペテロにとって、福音書の著者ヨハネは霊的なライバルでした。伝道者も他の働き人と比較し、妬みの気持ちを持ってしまうこともあります。しかし、他の働き人と比較する必要はありません。伝道の賜物も牧会の賜物も人それぞれであり、それぞれ置かれている場で活かせばよいのです。その点で、失敗・挫折は自分のあり方を見直す機会になります。主の御心は私たちを倒すことではなく、立ち上がらせて用いることです。自分で立ち上がるのではなく、箴言二十四章十六節にあるように、主ご自身が立ち上がらせてくださいます。

第三集会

第三集会では、世界宣教の立役者としてのパウロが扱われました。第二コリント十二章六節から十節。ピリピ三章四節で語っているように、パウロはペテロのような無学な者ではなく、誇ることのできるものが多くありました。しかし、第一コリント十五章十九節や第一テモテ一章十五節を見ると、教会を迫害した過去に対する後悔の思いは残り続けました。伝道者は、許されざる失敗もあることを覚えなければなりません。パウロはしかし、同時に、宣教者として栄光の過去も持っていました。

成功した時、人は慢心に陥り、神の目からは忌み嫌われるものになることがあります。また、物事をはっきり言いすぎるその性格が妨げになったのかもしれません。伝道者で豊かな賜物を持っている人もいるが、その人は気をつけなければなりません。伝道がうまくいかなかった時に、その賜物をこの世のことに用い、認められようとする誘惑に晒される可能性があります。

パウロは改心後、すぐに神に用いられたのではなく、しばらく故郷に身を隠した時期がありました。伝道者にも神が「時を待て」と言われることがあります。また、パウロにも挫折の経験がありました。使徒十七章三十二節に短間見ることができます。パウロはそれでも、時が良くても悪くても、働きを続けました。旧約の預言者たちも同じ姿勢でした。伝道者も同じであるはずです。自分が期待していない時に、働きの実が現われてくることがあります。

パウロはその知識の豊かさのゆえに、この世の知恵を使う誘惑がありました。また、それによってこの世から評価されて神の栄光を盗む危険もありました。一人でうまく行った時には独善的に自分に栄光を帰してしまう危険がありますが、皆で協力し合っているならば神に栄光を帰すことができます。パウロもそうでしたが、伝道者たちは協力し合い、励まし合うことが大切です。うまくいっていない時こそ、一人閉じこもるのではなく、カンファレンスのような集まりに出る必要があります。第二コリント一章二十四節に示唆されているように、パウロはその優れた働きのゆえに、他の仲間を支配する危険がありました。有能な人はその可能性があります。他の働き人や教会を支配するならば、それはバプテストの原則にも反します。

様々な問題や課題があっても、パウロが第二テモテ四章七、八節で語っているように、走りぬくべき道のりを走りぬいたと言うことができれば幸いです。何が成功で何が失敗かは、最終的には人間にはわからず、神だけが評価されます。たとえ成功していても、自分の名を成すためにやっていることがあります。また逆に、失敗しているように見えて、神の栄光を表していることもあります。失敗が生かされて、最終的に成功に導かれることもあります。自分の賜物を活かし、他の人と比べず、置かれた場所で忠実に主に仕えることこそ、神に栄光を表すことになります。

救霊にかかわる仕事、教会を建て上げる仕事、それ以上に光栄な仕事はありません。ピリピ三章十三節、十四節にありますように、お互いに前進を続けたいと願います。

Women's meeting

婦人集会レポート

第一婦人集会
講師
サンディ・パイエット先生
茨木聖書
バプテスト教会

サンディ・パイエット師がマタイ一四章二十二～三十三節から教えてくださいました。先生を通して、私は主から三つのことを教えていただきました。一つ目は、主が命じてくださることは、水の上を歩くことと同様に私には不可能だということです。「私にはできる」と思うかもしれませんが、イエス様と共にいなければ私は何もできません。二つ目は、ペテロが沈みかけた時に隣の人にではなくイエス様に向かったように、私の悩みも主に打ち明けることです。主は、誰にも言えない、また分かってもらえない苦労や、疲労、病を知っておられます。三つ目に、主がペテロを船に戻してくださったように、失敗する私を主は何度も船に戻してくださるということです。主が私を回復させてくださるのであり、回復させられた者は主を礼拝します。お話を伺って、尽きることなく、朝ごとに新しい（哀歌三章二十二～二十三節）主の憐れみに心から感謝いたしました。

（文：神学校三年　鈴木しのぶ）

第二婦人集会
講師
三谷克美先生
平塚聖書
バプテスト教会

伝道者の働きは人間関係です。人と関わり、み言葉をお伝えし、魂を救いに導き、信徒を訓練します。伝道者と信徒の信頼関係が良好な中でこの働きが進んで行くなら、教会は秩序正しく、いい空気の中で成長できると思います。エペソ二章十四～十六節にある通りキリストが私たちの平和であり、隔ての壁は打ち砕かれているのでそれは可能な事。しかし、人間的な問題や伝道者が躓きとなって教会が混乱する事が多々あるのです。反省しても、関係を回復しようと思ってもうまくいかない状況は苦しいものがあり、劣等感や自信喪失の中では十分な働きができません。主のもとに行き、許しとお言葉を求め、召しの確信に戻るなら立ち上がる事ができます。新たな思いで主がお与え下さった教会を愛するなら、縛りから解放されます（ピリピ二章三節）。自分自身に気を付ける事、何の為に主が自分を立てて下さったのか自覚している事（Ⅰテモテ四章十二～十六節）。そうとは言え完全にはなれないのだから失敗しても仕方ないと思わないで、主の前に謙遜に忠実に歩むべき事（Ⅰサムエル十五章十七～二十三節）。主の召しに与った事、それは責任と共に素晴らしい立場に違いありません。精神疾患についての知識も深め、長く主に仕えましょう。